

# 釜石舞台に「希望学」調査

## 言いたい 聞きたい

「希望って何？」—そんなテーマで調査研究しようと、東大社会科学研究所が取り組む「希望学プロジェクト」。24日～30日、かつて鉄の街として栄えた釜石市を舞台に本調査が実施される。なぜ、いま希望なのか。そして釜石での調査で何をを目指すのか—。プロジェクトリーダーを務める玄田有史・同研究所助教(41)に聞いた。(石平道典)

—なぜ、いま「希望」なのでしょう。インターネットで「希望」の文字をタイトルに含む本を検索すると、98年くらいから急に増え始めている。社会の先行

東大助教授 玄田 有史さん(41)



## 社会との関係見つめ直す

きについて、不透明感が急速に強まった頃から希望がよく語られるようになっていると感じます。私は二トの問題に取り組んでいますが、若者と話して感じるのは、働く意欲が低いのではない、働くことに希望が持てないということです。将来に向けて行動を起こす前提としての希望が、いまの日本は揺らいでいるのではないか。だからこそ、「希望」の本

当の意味を考えてみたいと思っています。「希望学プロジェクト」について、教えてください。希望とは何か。どのような社会に希望は生まれるのか。一人ひとりの希望が社会にどんな影響を与えるのか—。

政治、経済、社会など多くの分野の研究者が参加し、希望を横断的に研究していきます。「希望を社会科学する」がプロジェクトのテーマです。当面、05年度から3年間をメドに活動します。

—その調査地に、釜石市を選んだ理由は。全国の市町村から選定しました。その結果、製鉄やラグビーの街として全国に名前が知られ、近

将来のためにできることは—といったことを中心にうかがう予定です。調査結果は、書物や論文、ホームページなどで発表し、釜石市民の方々にも報告します。—釜石調査で期待することは何ですか。希望とは「希にしかかなわれない望み」と書き、多くの希望は失望に変わります。しかし、失望や挫折を経験することで初めて得られるやりがいや充実、そして本当の希望があると思います。「挫折は決して悪いことばかりではない」「希望そのものが成長していく」といったことを、市民の皆さんと一緒に考えていければと、調査を楽しみにしています。

東大社会科学研究所の関係者約30人が、産業、福祉、文化、スポーツ、行政など各方面で釜石を担う人たちにインタビューさせていただきます。インタビューでは、①釜石の変化をどう感じるか②現在、これからの釜石の課題は③課題の解決に向けた具体的な道筋は④現在の希望は⑤釜石の

釜石は、希望も失望も経験してきた街。挫折を乗り越えながら、人々との関係を見つめ直し、希望を持つことの意味を考えていける場だと思っています。